

四月十三日、棗荘そうそう。五月十四日、禹王山の戦闘では第十一中隊が全滅しました。戦は皆きびしかった。敵も死に物狂いでしたから。

五月十六日、徐州戦。六月七日、亳県入城。

八月十七日、盧州入城。九月七日、光州占領。

九月二十九日、羅山占領。十月十二日、信陽占領。

十一月十七日、長江埠入城。十一月二十九日、揚子江着。

十四年一月、九月、浦口、南京、順徳、曲周、邯鄲邯鄲などの警備。

三月、遺骨還送の命令が出ましたが、私は家族がいないので辞退したのですが、遺骨護衛の二十人くらいと一緒に上海から乗船し、鳥取の連隊に納めました。戦友たちがそれぞれの留守宅に手紙を出しましたら、ある一人息子の家で、その人の着物を着て座つてくれと頼まれました。私が着物を着て座つたら、その親は喜んでくれました。私は両親を子供の時に亡くした一人者です。戦友の代わりに親孝行をしました。それらの訪問した家では大変歓迎してくれました。

十四年十月、部隊は凱旋しましたが、その時はノモンハン戦へ行くとかの噂があつたのですが、停戦の協定も成立し上海から帰国しました。鳥取では礼砲を撃つて盛大な凱旋の歓迎を受けました。

十一月、軍曹に任官除隊（召集解除）となりましたが、近所の者や戦友は再召集で二、三年行つてきたのですが、私にはその後召集はありませんでした。

帰還後は病氣も怪我もなかった。私は戦地で大砲は撃つても殺生は一切しなかつたお陰かも、とひそかに思うこともありました。

私の軍隊体験

静岡県 斎藤 清人

私はその日、村の青年団の年中行事である富士山麓における営林署管内の下草刈り作業に汗を流していた。

その時、息をはずませた郵便配達人が「召集令状ですよ」といって一枚の赤紙を私に手渡した。富士山の

三合目付近まで届けてくれた御厚意に対する御礼の言葉と共に胸に迫る緊迫感がヒタヒタと押し寄せてきた。

急遽、家に帰り出征準備にとりかかる。話を聞きつけて親類知人が駆け付ける。父母弟姉妹と二十歳の私との六人家族で、父は農業と職人との兼業で割合に楽な生活であったが、出征という生活環境の急転換に父をはじめ家族は戸惑いと不安の交錯した思いに包まれていた。

村外れまで青年団の騎馬隊による音楽と軍歌に送られて、昭和十四年十二月十一日臨時召集による第一補充兵として、名古屋の第三師団輜重兵第三連隊補充隊第一中隊に入隊しました。

毎日が猛特訓で徒歩教練、執銃教練、射撃訓練、雨の中の匍匐前進、厳しい訓練であったが、私は青年学校教育を受けていたので他の人たちよりも楽であった。

昭和十五年一月十五日、宇品港を出航して征途に就くこととなった。我々は二五〇名の交代要員であり、二十歳から四十歳までの兵の編制である。他に各兵種の部隊があり、その混成部隊であった。何の予告もな

く輸送船の船底に押し込まれ目的地も分からぬまま出航した。

一月十九日、ウースン沖を通過。二月三日湖南省応山県の第三師団司令部に到着。師団司令部の副官部に配属され師団長の伝令当番として勤務することになった。

直属長には高級副官三名、下士官一名、兵四名であった。その時の師団長は山脇正隆中将であった。第一回目の戦闘参加は冬期作戦で、洛陽店付近の戦闘に参加した。我々の任務は設営、伝令、情報、その他師団長の身の回りの世話で、それを六人くらいで勤めていた。

四月九日宜昌作戦が発令され、戦闘に明け暮れる中、昭和十六年三月十日陸軍一等兵に任命され、晴れて一人前の兵隊になった。師団司令部の将校、下士官はもちろん、兵もすべて乗馬行動で、司令部の護衛兵には歩兵部隊が主幹である。これに各兵科の一個小隊単位の部隊が従った。兵力は非常に少なく、時には敵の散発的ゲリラ攻撃もあり、麦畑の中を毎日毎日戦闘、停

止、行軍を繰り返しながら前進するのであり、いささか心細くもあつた。

降り続く雨になると道路も泥濘と化し、足を取られて行軍速度は落ちて渋滞してくる。先行部隊に間を空けられないように間をつめる。体力を消耗すること甚だしい。

この作戦に信陽に駐屯している静岡の歩兵第三十四連隊が出動、地元部隊として我々に戦闘協力してくれたことが最も感激が深かつた。部隊には知人も多く、心強い限りで、百万人の味方を得たような気持ちになつた。

昭和十五年八月、当陽付近の警備任務に就く。昭和十五年十月、京漢線東地区の作戦に参加。昭和十六年一月十五日より予南作戦に参加。四月二十四日江北作戦に参加。八月十五日から第一次長沙作戦があつたが、この時の作戦は非常に有利に展開した。しかし山岳作戦が多く山また山の連続であり、輸送部隊の苦勞と砲その他の機材の運搬には勞力と危険とで血のにじむような苦勞であつた。特にこの時、季節は夏で、マラリ

アに苦しめられ、兵の損耗は大きかつた。この時の師団長は前任者と交代し高橋中将が師団長であつた。

その後十月になつて確山作戦に参加したが、この作戦は討伐程度の小さな作戦であつた。

昭和十五年一月十五日、私は設営のため先遣隊員として先行中、敵兵に機関銃で狙撃され、頭部貫通銃創を受け人事不省となり、戦友に助けられ後送されることとなつた。幸いにして急所を外れていたため生命をとりとめ回復も早かつた。

五月浙贛せいかん作戦に参加、十二月台覚山作戦に参加、十八年一月大別山作戦に参加、終了後応山駐屯地に車両輸送その他の方法で帰還。師団長が内地転任のため、これに同行することとなつた。

十二月八口大東亜戦に突入、十二月十五日から第二次長沙作戦が始まつた。この戦は前回の第一次長沙作戦と異なり大変な負け戦であつた。この原因は敵空軍力の増強による友軍の制空権の喪失、敵軍の火力の強化充実であつたが、それにもまして最大の原因は食糧、彈藥の徹底的欠乏であつた。司令部自体も食糧がなく

付近の青いものは採りつくし、手榴弾をクリークに投入して魚を捕り、小動物、昆虫まで口に入れる有り様であった。

漢江を出て四月十六日上海を出航、同十九日長崎港上陸、その後荷物を届けて名古屋の原隊に復帰した。

その間昭和十八年三月一日付陸軍伍長に任官していた。昭和十八年四月二十八日召集解除となる。復員後は幸いにして負傷の後遺症もなく家業に集中専念することができました。

しかし、私の出征後に千葉の陸軍少年戦車学校（少戦校）がこの富士山麓に移駐したため農地山林等すべてが、軍に一反歩当たり二〇〇円くらいで買収され、我々の耕作する農地は無くなってしまったのです。そのため（少戦校）の雇傭人となり働かざるを得なかった。終戦となり農地の返還を求め、返還された荒れ果てた農地を開拓再耕して、毎日鋤、鍬の手仕事で食糧の増産に励んだのである。

徴用軍属で漢口攻略

兵として対戦車特攻訓練

長崎県 西 浦 久 馬

大正八年二月十八日、島原市元船津の現在地で生まれましたが、我々の町は昔から漁業によって生計を立てている者が多く、私も東支那海で遠洋漁業の船に乗っていました。しかし、支那事変が始まり揚子江沿岸地域の進攻のため、私たちの乗っていた漁船は徴用され、乗組員も同時に軍属として徴用された。船ごと船長以下船員全員一まとめの徴用です。

我々の船である「第三喜吉丸」は、北洋漁船第五〇三（徴用No.）となる。所有は竹田水産で六〇トンの優秀船であり、中支派遣碇泊場監部所屬。私は陸軍機漁船の注油手を命ぜられる（十三年七月二十一日傭人を命ず。厚生省援護局調査課による）。

部隊名は中支派遣軍佐伯部隊北尾部隊であり漢口方